

明るく安心して語り合える場が増えるといい

池町真夕子 当事者家族

(元マーケティングリサーチャー)

岸井ゆきの×高橋一生 W 主演の NHK ドラマ『恋せぬふたり』にどはまりしたのが 2022 年 1 月。他者に恋愛感情も性的欲求も抱かない「アロマンティック・アセクシュアル」の男女が始めた同居生活が周囲に波紋を広げていく様子を「ラブではないコメディ」として描かれた。制作にあたっては当事者や当事者団体による考証やそれらに対する取材をもとにしたといわれる。

1972 年生の団塊の世代ジュニア、社会の成熟には、まだ程遠い昭和のど真ん中であって「性の多様性」という言葉すら存在しない時代を駆け抜けてきた。福岡県の田舎で育った私は、「女性は結婚して家庭を持ち、子を産み育てることが当たり前で、変に学歴を付けると都市部に出て行き実家や親族と疎遠になる」と周囲にいわれた。女性は出ても短大程度が望ましい。そのことに対して疑う余地はない。恋愛はするものだと考え、実際に恋愛をして結婚をしたのであるが、ドラマ『恋せぬふたり』がきっかけとなり、「今の社会に生まれていたらアロマンティックだったかも知れない」「私はすべてが恋愛の対象者だ」と職場の仲間と真剣に議論した。日頃からあらゆるジャンルのお題をフランクに話せる貴重な仲間だった

今回の小野アンリ先生の講義では、その当時を思い出した。男として、女として、その枠組みの中で生きる現代人でさえも、蓋を開ければ自認する性的傾向は十人十色であると推測される。LGBTQ+といわれる人たちを特別扱いにする

のではなく、人間の誰しものが性的傾向の濃淡があるとしたら、そのすべてを一個性とみなして、明るく安心して語り合える場が、この社会にもっとあるといい。LGBTQ+だから、どうのと決め付けるような発言やヘイト活動は絶対に許してはならない。人間は、ある集団をラベリングして差別し、攻撃をしたがる生き物であるが、人間同士がいがみ合う世界の末路はいつの時代も決まっている。そんなことをしたって誰も幸せにはならない。

小野アンリ先生が存在そのものが、偏見に満ちた現在社会に一石を投じるものであると信じたい。アンリ先生、応援しています。
この度は貴重な講義をありがとうございました。

～あとがきと質問～

アンリ先生の言葉には力がありました。強い波動というものでしょうか。その日は赤坂には行くことができませんでしたが、できることなら生の講義を聴きたかったです。そして、放課後も。最後に福岡から東京に拠点を移した理由を知りたかったです。

私は転勤族の妻としての立場が長く、様々な地域で国内外色んな価値観に触れた経験から自分では偏見のない人間だとおもっています。それでも最期は福岡に帰郷したい気持ちが強いのです。地方ではなく、東京でしかできないことが、もし、あるのならご教示いただきたいです。